

19世紀以降のイギリスにおける学校給食

School dinner in England since the 19th century

櫻木 晴子

はじめに

Into these bowls, Mrs. Squeers, assisted by the hungry servant, poured a brown composition, which looked like diluted pincushions without the covers, (Dickens, 89)

これはチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) による長編小説『ニコラス・ニッケルビー』(Nicholas Nickleby, 1838-1839)の第8章における寄宿学校の朝食の一場面である。主人公のニコラス・ニッケルビーは父親を亡くしてから苦しい生活を余儀なくされ、叔父ラルフの紹介でドゥーザボイズ・ホール寄宿学校に勤めることになったが、校長スクィアズ氏は、私生児や孤児ばかりを受け入れては虐待を繰り返す冷酷な人物であり、その妻スクィアズ夫人も同様であった。ここでスクィアズ夫人が「ボウルの中に」流し込んでいる「茶色の混合物」は、「粥」である。寄宿学校で子供に与えられる朝食は、この粥と「精白していないパンのかけら」のみであると書かれている。育ち盛りの子供に与えられる食事としては、現代の感覚では想像もできないような粗末な食事である。

それにもかかわらず、経営者側のスクィアズ氏一家は夕食で「高級なステーキ」(exclusive steak)を味わっていることを考えると、スクィアズ夫人の経営は、きわめて無慈悲な、それ自体が虐待とも呼べる方針のうえに成り立っていることがわかるであろう。この背景

には、1870年に始まった義務教育が、20世紀半ばになって初めて本質的に確立していくという歴史がある。それまでは貧困家庭の子供たちは、救貧的・慈善的な立場から作られた無償の学校、またはドゥーザボイズ・ホールのようにわずかな授業料で通うことのできる私設学校に通うほかなかったのである。

本論は、チャールズ・ディケンズの作品に描かれた寄宿学校での食事情を出発点として、19世紀後半のイギリスにおける「救貧」と「教育」の二つの制度という視点から、当時、何が原因で学校の食事がこのように粗末なものになっていたのかに注目したい。よって焦点となるのは、裕福な家庭の子供たちが通う学校ではなく、主に労働者階級の家庭の子供たちが通っていた学校の実態である。ディケンズは労働者階級出身の作家であり、きわめて厳しい労働環境のもとで苦勞した経験をその小説にも投影している。まずは、ディケンズの生い立ちと、彼の後期作品との関係を探ったあとで、救貧制度と教育制度の歴史について振り返ることで、当時のイギリス社会において、労働者階級の人々がどのように扱われ、それがどのように学校給食に影響を与えてきたのかを明らかにしていく。そして議論を現代への視点へとつなげることで、学校給食制度が新たに抱えている問題点と原因を、その根底に存在し続ける階級の存在とあわせて考察していきたい。

1. ディケンズは実態を描いたのか

1-1 ディケンズの生い立ち

1812年の2月7日に生まれたチャールズ・ディケンズは、9歳のときに朗読家、雄弁家として知られていたジャイルズ氏という人が経営する学校に通い始める。「後年ディケンズは、ジャイルズ校での教育について大変高く評価している」（藤村、39）とあるように、この頃のチャールズの学校生活は幸せなものであった。しかし、ディケンズの父親ジョンの借金が膨らんでしまい、ディケンズは学校を辞めざるをえなくなる。その後、ジョンは破産し、逮捕されてマーシャルシーの債務者監獄に入れられてしまう。ディケンズはこのとき12歳であったが、一家は働き手を失ったため、彼は靴墨工場で働くことになった。身体的に激しい労働ではなかったようであるが、精神的苦痛という側面から考えてみると、ディケンズは非常に苦しめられたのではないだろうか。ディケンズは本を読むのが好きで学校にも恵まれ、幸せな暮らしをしていたにもかかわらず、親の借金によってその生活は転落していき、学校を続けることができなくなってしまったのである。それだけではなく父親は監獄に入れられ自分は靴墨工場で働く身となり、パンとチーズとビールだけという寂しい食事からくる空腹に耐えなくてはならなかったことから判断すると、まだ幼かったディケンズにとってはあまりにも急激な変化であり、屈辱的な記憶が残ったと考えられる。数ヶ月の後、ジョンの釈放とともにディケンズは工場から連れ戻され、彼はジョーンズ氏の経営するウェリントン学院へ通い始める。この学校はディケンズが以前に通っていた学校とは全くちがっていた。どのようにちがったかという点、当時の学友であったヘンリー・ダンソンによれば、この学校は「恥ずかしいくらい運営がまずくて、生徒たちはほとんど何の進歩もしなかった。経営者の

ジョーンズ氏はウェールズ人でとても無知な人でした。それに単なる独裁者で、主にやることといたら生徒たちを鞭で打つことだけであった」（藤村、47）と言っていることから教育の質が低く、生徒たちには悲惨な仕打ちがされていたようである。

1-2 ディケンズが受けた教育と作品

これまでに述べたことがディケンズの幼少時代、そして彼が受けた教育についてであるが、この時代を三つの段階に分けると、ジャイルズ校時代、靴墨工場時代、そしてウェリントン学院時代ということがいえる。この三つの時代それぞれと、ディケンズが後に書いた作品と重なる部分を挙げていく。

まずは、ディケンズが通ったジャイルズ校と『デイヴィッド・コパーフィールド』との関係についてである。『デイヴィッド・コパーフィールド』には、ストロング博士という人物が経営する学校が登場し、デイヴィッドは学校を去る際、そこにいることができたことの幸せや、博士に対する強い愛情を述べている。ディケンズはおそらくジャイルズ校でのみ幸せな学校生活を送れたのであり、彼がストロング博士の学校を描いた際には当時の記憶が影響していたと考えることができる。

次に、靴墨工場と『デイヴィッド・コパーフィールド』はどのように関連しあっているだろうか。貧困によってディケンズが靴墨工場で働かなくてはいけなくなったのと同様、『デイヴィッド・コパーフィールド』の主人公であるデイヴィッドもまた、子供ながら小僧に出され、長時間労働や空腹に耐える日々を送っている。このときにデイヴィッドはミコーバー氏のもとで下宿をするのだが、彼の家計もまた窮迫しており、債務者監獄に入れられてしまうという場面があることから、ミコーバー氏はディケンズの父親がモデルであると考えられる。

最後に、ウェリントン学院と『ニコラス・

ニッケルビー』との比較である。先にも述べたように、ディケンズが実際に通ったウェリントン学院の特徴として挙げられるのは、校長が生徒に体罰を与えていたこと、そして生徒たちの学力が伸びるような教育は行われていなかったということである。これらの特徴と『ニコラス・ニッケルビー』に登場するドゥーザボイズ・ホールの特徴は一致するのだろうか。『ニコラス・ニッケルビー』において、校長であるスキアズ氏が自分の妻とともに生徒を虐待している具体的な例を、「ドゥーザボイズ・ホール内部の制度について」として書かれた第8章に見ることができる。スキアズ氏が半年に一回ロンドンを訪れた後の恒例となっている、生徒たちに対する報告会のようなものの場面がある。この報告会で話題となるのはスキアズ氏がロンドンで会った親戚や友人について、そこで耳にしたニュース、持ち帰った手紙、生徒たちの保護者によって支払われたお金、そして支払われないままとなった勘定についてなどであるが、スキアズ氏は父親が支払った代金が2ポンド足りなかったボルダーク少年を前に呼び、むちで自分の腕が疲れるまで徹底的に打つのである。

次に、この作品の中で描かれているドゥーザボイズ・ホールの教育についてであるが、この学校の教育方針が読み取れる部分が次のようにある。

Now, the fact was, that both Mr. and Mrs. Squeers viewed the boys in the light of their proper and natural enemies; or, in other words, they held and considered that their business and profession was to get as much from every boy as could by possibility be screwed out of him. (Dickens, 87)

つまり、この学校における目的は彼らの労働

力を最大限に利用することであった。ニコラスが赴任後、初めてスキアズ氏に見せてもらった英語の授業では、突然少年を馬小屋へ働きに行かせる。また、他の生徒たちに対しても、結局授業を解散させて子供たち全員を働かせてしまう。授業の内容自体も、ある生徒が文を読み上げ、その後にスキアズ氏がその綴りや意味を述べるということを繰り返すだけのものである。ニコラスがスキアズ氏の授業のことを「だらしない授業」"slovenly lessons" (Dickens, 95) と表現している部分がある。したがって、この学校で子供たちの学力を伸ばそうという意欲はスキアズ氏からはうかがえず、授業は機械的に行われ、それすらもしばしばスキアズ氏から労働を命じられることで中断されていることがわかる。

このように、ウェリントン学院とドゥーザボイズ・ホールのどちらの学校でも子供は虐待され、授業は非常に粗末なものであったことで一致しており、ウェリントン学院がドゥーザボイズ・ホールを描く際のモデルになったということは十分に考えられるのである。

2. 学校給食に影響を与えた制度

2-1 学校給食について

学校給食について述べる前に一つ明らかにしておかなければならないことは、『ニコラス・ニッケルビー』が書かれた19世紀前半のイギリスでは食糧難が起きていなかったのかどうかということである。もし全国的に食糧不足に陥っていたのであればとすれば学校給食の質の悪さや量の少なさの原因がそこに求められるからだ。

「飢餓の40年代」という言葉がある。この言葉は、1840年代のイギリスにおいて大飢饉が起きていたことを想起させるものであるが、実は20世紀に入ってから関税改革運動が

起きた際、それに反対する側が運動を批判する意図で「1845年からのアイルランドのジャガイモ大飢饉とも重ね合わされて」（松村、65）、使われるようになり、普及したものである。関税改革の主な内容は、「外国産穀物をはじめとする農産物に関税をかける一方、帝国産農産物には従来どおり無関税で輸入を許そうという提案」（服部、73）などであった。この関税改革運動に反対する団体はこれを「穀物法の再制定」として批判し、同団体によって『飢餓の40年代』（*Hungry Forties*）という本が書かれて爆発的に売れたのである。穀物法が作られたのは1815年であり、その目的はナポレオン戦争中に高騰した穀物の値段を戦争が終結した後も維持するために外国産小麦の輸入を禁止するというもので、これによって1810年代は小麦の値段は『飢餓の40年代』が出版された1904年の小麦価格の3倍を維持し、貧民階級は非常に苦しい生活を強いられた。このように人々を苦しめた穀物法が廃止されたのは1846年であったから、「飢餓の40年代」という言葉は20世紀に沸き起こった関税改革の実現によって歴史が繰り返されてしまわないよう、人々のつらい記憶を呼び覚ますものとして使われたと考えることができる。

ここで注目したいのが小麦の値段が高騰していた1810年代以降、『ニコラス・ニックルビー』が書かれた1830年代までの食糧事情がどのようなものであったか、つまり、十分な食糧が国内に存在していたのかいなかったのかということである。確かに小麦の値段が高騰すると貧民は十分な食べ物を買うことが困難であり、また、ナポレオン戦争の影響で1815年までは食糧不足が起きていたと考えてよい。しかし、18世紀末から起きていた産業革命によって都市向けの商品穀物の生産が必要となったことによって、農村で第二次囲い込み運動が行われて大農場経営が確立すると、農業は著しく改良されて農業生産力が飛

躍的に向上する。その結果、1820年代には穀物法があるにもかかわらず小麦の値段は1810年代と比べておよそ3分の2にまで低下し、その後穀物法が廃止されるまでもに少しずつ値段は下がっていった。つまり、穀物法によって外国から農産物が入ってこなくなり、一時は小麦の値段が高騰したものの、国内の農業生産量が農業改革によって伸びたことで小麦の高い値段が維持されることはなくなり、国内で食糧が不足していたとは考えづらいという結果が導き出されるのである。だからといって労働者階級の人々の食生活が豊かであったかということ、そうではなかった。

ウィリアム・コベットは自分で農村を見て回り、その実態をまとめて『農村騎馬紀行』（*Rural Rides*）という本を1930年に出版したが、「ウィルトシア」（Wiltshire）というイギリス南西部に位置する州の農村を訪れた箇所ので、“This is the place that the Gallon-loaf man belongs to.”（Cobbett, 18）「ここはガロン・ローフで食いつないでいる人が住んでいる場所だ」（コベット、18）と述べている。“Gallon-loaf”というのはスピーナムランド制のもとで使用されていた秤で使われていたパンの単位であることから、そこに住む人々が食べ物を自力で手に入れるのに苦労していたことがうかがえる。また、ウィルトシアで生まれた農村作家であるリチャード・ジェフリーズ作品にも「ウィルトシアの農業労働者の食餌」（メネル、340）についての記述がある。それによると彼らの食事は、「主にパンとチーズで、ベーコンを週に2、3回、タマネギで変化をつけた。（中略）野菜は贅沢品で、広い庭は、だから、彼が持てるもののうちで、最も有難い授り物」（メネル、340）であり、メネルによると、非常に質素なこの程度の食事でも北イングランドよりはましであったという。

本題の学校給食についてであるが、ドゥーザボイズ・ホールの学校給食との比較を可能

にするために、まずはパブリック・スクールの学校給食がどのようなものであったのかについて述べたい。1864年に行われた9つの名門パブリック・スクールを対象とした調査結果がまとめられている王立委員会報告書からは朝食の内容を知ることができる。「彼は上級生の朝食を準備した。紅茶とトーストであったが、ときには卵料理やポリッジを作った」(松村、172)とある。昼食、お茶、夕食については、『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's school days*)という小説に多く描かれている。昼食の場面では、家政婦が大きな肉を切り分けたり、集まってきた生徒のうちの数人は「食事のたしにと、酢漬けやソース瓶を携えて」(ヒューズ、116)いたりする。そして主人公のトムは「食事の祈りを唱えるまでには、ご馳走をおいしく食べ終わっていた」とあり、生徒たちにはご馳走と呼べるほどの十分な食べ物が与えられていたことがわかる。夕食の前にはお茶の時間がとられ、「生徒は各自にパンの塊の四つ割り一個とバタの小塊一個を貰い、お茶は幾回でもお変わりができた。そしてそれに、焼きじゃがいもとか、鰯とか、小鯛かいった類の余分のご馳走を添えない生徒はほとんどいなかった」(ヒューズ、141)。生徒たちがお茶に添えている焼きじゃがいもなどは自分たちのお金で外から購入してきたものであり、トムもまた彼らの寮の特約売店であるという店でソーセージを購入している。「トムはソーセージを小さく切って近くの幾人もの連中に分けてやりながら、こんなにうまいじゃがいもを食べるのも、こんな面白い連中に逢うのも、生まれてはじめてだと思った」(ヒューズ、142)という記述からもわかるように、生徒たちには食事を楽しむ余裕が見られ、反対に不満は感じられない。7時からの夕食はパンとチーズとビールであった。また、別の文献によると、ラグビー校では「9時になると夕食とほとんど同じ夜食」(伊村、65)が出されたということから、

お茶を含めると1日に5回も食事を摂っていたということになり、パブリック・スクールの生徒たちは飢えとは無縁であったと考えることができる。

ドゥーザボイズ・ホールでの朝食は薄いお粥にパンのかけらであったが、1日に与えられる食事はどのようなものであったのであろうか。まず、昼食の場面では子どもたちとニコラスは「塩漬けの牛肉を少し」"some hard salt beef" (ディケンズ、92)を与えられただけであり、夕食は「パンとチーズの食事」"a meal of bread and cheese" (ディケンズ、95)であった。この1日の食事のエネルギーはおそらく1,000キロカロリーには満たないであろうと考えられる。イギリスの成長期の男子の推薦栄養所要量(厚生省保健医療局、224)は、7歳から10歳で1,970キロカロリー、11歳から14歳になると2,220キロカロリーであるから、彼らは半分から半分以下程度のエネルギーしか摂取していないこととなる。また栄養面で注目したいのが、この食事内容ではビタミンDが著しく不足しており、所要量のおよそ9パーセントしか満たしていないということである。ビタミンDの主な働きは体内でのカルシウムやリンなどの吸収を促して丈夫な歯や骨を作ることであり、不足してしまうとクル病や発育不全の原因となるので成長期の子どもたちには特に不可欠な栄養素なのである。このような明らかな栄養・カロリー不足を反映するように、作品中では「青白くやつれた顔、やせ細って骨ばった体系、老人のような顔つきをした少年たち、手足が奇形して発育不全の少年たち、そして曲がってしまった体をほとんど支えきれないくらい貧弱な脚をした少年たち」(ディケンズ、88)という表現で子どもたちの弱りきった様子が描かれている。また以下は、子供ではなく死体を描いているのではないかと錯覚してしまうような描写である。

...little could be distinguished but the sharp outlines of pale faces.... its thinness hidden by no covering, but fully exposed to view, in all its shrunken ugliness. There were some who, lying on their backs with upturned faces and clenched hands, just visible in the leaden light, bore more the aspect of dead bodies than of living creatures [...]. (Dickens, 146)

実はこれら1日3回の食事のほかに作品中で子どもたちに与えられているものがあり、それは「硫黄水」"brimstone and treacle"と呼ばれる解毒剤であった。スクィアズ氏は少年たちの血をきれいにするために与えているのだとニコラスに説明するが、スクィアズ夫人はそれを遮って実は普通の食事よりも安く少年たちの食欲を奪う目的もあるということを暴露している。物語の始めのほうでロンドンを訪れたスクィアズ氏が新入生の親と会った際、一見冗談のように「我々の施設では子どもたちの食欲は尊重しませんよ」と言っている場面があるがこれは本心から出てしまった言葉であるということがこの場面で明らかとなっている。スクィアズ夫人がスクィアズ氏に向かって「今日は硫黄をあげる日ではないの？」と言う場面から、毎日与えているわけではないことがわかるが、現実においても子どもたちがこのような方法で食欲を操作されていたという可能性を否定することはできない。それゆえ次の箇所ですすように、ドゥーザボイズ・ホールにおける食事の場面ではラグビー校で見られるような明るさや楽しさは全く見られない。

There was a long row of boys waiting, with countenances of no pleasant anticipation, to be treacled; and another file, who had just escaped from the inflic-

tion, making a variety of wry mouths indicative of anything but satisfaction. (Dickens, 88)

このようにスクィアズ氏やスクィアズ夫人は子どもたちの栄養状態について全くといていいほど無知であり、また無関心である。これは「栄養知識が普及していなかった19世紀前半」(安達、173)の学校においてはごく普通の光景であったと考えられ、この時代には子どもたちが健康的に成長を遂げることもよりもいかに経費を節約するかということのほうが重視されていた。

実際の例として、ドゥーザボイズ・ホールと同じヨークシャーのクラソン校という私設学校の出身者であったジョン・ブルックスという人物が当時の学校生活についての記述を残している。それによると朝食として出されたのは酸っぱいミルクと黒パンで、夕食には塩辛い脂身の牛肉だけというものであり、当然これだけでは足りずに空腹に耐えかねた生徒たちは「カラスを捕まえると、それを引き裂いて教室のストーブで焼いて食べた」(藤村、130)という。また、ジェイムズ・アバネシィ氏も私設学校での経験を1834年に書き留めているが、彼の通った学校で出された食事は次のようなものであった。「子供たちはわずかの食事を立って食べるよう強制されていた。朝食は黒パンと水っぽい牛乳、昼食は少し多目の牛乳とパン、それにひとりあたり1オンスばかりの腐った肉の入ったスープがあった。夕食は多目の黒パンと牛乳だった」(藤村、132)。これらの記述とディケンズが描いた学校給食とを比較すると、物語に出てくる学校給食が実際のものを非常に的確に表現しているということがわかる。

2-2 救貧制度の変遷

イギリスでは16世紀以降毛織物業が発展し、農村共同体が崩壊した。この時期にイン

グランドの農地の約半分が囲まれ、多くの浮浪貧民が誕生した結果、1601年にエリザベス救貧法が施行された。監禁懲罰と慈善を原則とするこの制度の内容は、貧民を無能貧民と呼ばれる障害者や老人などの労働不能者と、働けるが実際には働けない浮浪者や乞食などの有能貧民に分類し、無能貧民には教会による慈善活動が行われるのに対し、有能貧民は厳しく取り締まり、労役場や懲治監などに収容し強制的に労働させるというものであった。この法律は、「浮浪貧民の存在を、社会秩序をみだす有害なものとして、就労強制によって浮浪をやめさせ定着させよう」（新村、33）とするものであり、この対応の本質は、「真の救済ではなく、むしろ抑圧・管理であり、抑圧の中での救済」（新村、34）に過ぎなかったのである。

17世紀後半には自由な経済活動をめぐって議会と国王が対立した結果、私有財産権が確立するなど自由な経済活動が可能になった。また封建制度がたおれたことで議会主権体制が確立し、16世紀以降発展してきた資本主義的な経済発展の自由を束縛していたものが取り除かれた。これが市民革命である。このようにイギリスが自由主義的な社会へと変わっていくと、農村共同体が存在していた頃には守られていた食料品の価格に関する慣行や消費に関する民衆の規範などの経済規範は消失し、裕福な者による食糧の買占めが起きた結果、値段が高騰してしまったために農民の生活はますます厳しくなっていた。市民革命後の1722年にエリザベス救貧法に代わって作られたのが労役場テスト法であるが、これは貧民を労役場に収容して自由を拘束し、織布や糸紡ぎなどをさせるというものであった。政府から注文を受けるという請負制であったので、労役場側は貧民への処遇を可能な限り切り詰めて利潤を得ようとしていた。そのため貧民は低賃金労働力として酷使され、エリザベス救貧法同様、貧困の根本的

な解決にはつながらなかった。

1780年代から起こった産業革命による急激な経済発展の一方で、都市の住民は自己しか頼るものがなく、働いたとしても保障がないため社会的に無権利状態に陥ってしまい、大衆貧困化が進んだ。1845年の調査によると、新興工業都市リヴァプールの人口の5分の1にあたる4万5千人が地下室に住んでいたし、工業都市の幼児の生存率（5歳まで生きられる幼児の数）はわずか8割であった。また、都市における死亡者の平均年齢はジェントルマンであれば35から38歳であったのに比べ、職工、労働者、召使の死亡平均年齢はたったの15から17歳であったことから、彼らの生活がいかに劣悪なものであったかがわかる。産業革命期に入って間もない1795年には食糧暴動をきっかけとしてスピーナムランド制が作られた。これは一定基準以下の賃金労働者には救貧税から補助金を出すというものであったが、救貧税を払う立場にある富裕な人々から、このような制度では労働意欲を低下させてしまうという世論が生まれ、結局は財政難で破綻してしまう。

1834年、救貧法が改正され新救貧法が作られた。この法律は、救貧院での扶助を院外の最低級の労働者以下のレベルにして救貧院を牢獄化し、みせしめとすることによって、「救済を受けるよりは死んでも働いたほうがましだ」（新村、34）と貧民に思わせて労働者に自立を強制し、彼らからよりいっそう搾取していくことをねらうものであった。これは貧困を自由放任社会の責任ではなく、個人の道徳的責任とするという原則に基づいており改正とはいっても貧民にとっては以前よりもいっそう過酷なものとなってしまった。

19世紀後半になると、これら「救貧法が放置してきた社会的な問題である貧困の現実を否定することができなくなり」（新村、35）、「ロンドン慈善組織協会」のように慈善事業が公的、私的に組織されるようになった。また

政治的な権利や社会的な権利を求め、全国的な規模で起こった労働運動（チャーチスト運動）の展開のもとにイギリスの労働者は徐々に生存を保障する公的手段を手に入れていった。

このように、16世紀以降のイギリスは、生存権重視の社会から所有権、経済活動の自由を重視する社会へと急激に変化し、人々の人間観や社会観も農村的な助け合いよりも財産所有を中心とする自由権を基礎とするものへと変わっていった。この個人主義的な思想のもとでは、自活できない人々や貧困者は人間的に劣等な存在と考えられてしまうようになり、いじめられて迫害されるという状況が長い間続いていたのである。

2-3 学校の移り変わり

イギリスで最も古い学校は文法学校（Grammar School）というものであり、現在でも有名なところにイートン校やラグビー校などがある。教育の目的は聖職者を養成することであり、ラテン語の文法を中心に授業が行われていた。文法学校では主に授業料を払うのが困難な児童を受け入れていたが、その定員は70名と少なく、礼儀作法や読み方の基礎などで選抜された。他にも、授業料を払うことのできる裕福な子弟を10名、さらに学校の外に下宿し、授業料も支払う「自費生」もいた。それでも文法学校は王族や貴族、聖職者、ギルド、富裕な私人からの寄付を受けて普及していき、「15世紀末までにイギリス全土で文法学校が約300校存在」（田口、11）していた。その後も文法学校の歴史が続いていた結果、16世紀末には学校の名声を慕い、「多額の授業料を自己負担してでもわざわざ入学してくる」（伊村、27）生徒が中心の学校へと変化し、現在もパブリック・スクールとして公立の学校とは区別され、独立した教育体系を確立している。

では、公立の学校の歴史はどのようなもの

なのだろうか。17世紀の末のイギリス社会を見てみると、資本主義が発展してきてはいたが、囲い込みの途中の段階でありまだ農村共同体が残っていたので、自分の土地で農業を営む人の数も多く、統計によると上層自作農は約40,000人、下層自作農は約140,000人とある。それでも労働者や土地をすでに失ってしまった人々の数は合わせて約764,000人であり、貧困者の数のほうが多いことがわかる。それに対し、19世紀初頭の統計によると、上層自作農は約7,000人、下層自作農は約21,000人と大幅に減少しており、農業や鉱業で労働者として雇われている人数は742,000人、そして職工や労働者の数はおよそ1,021,974人にまで膨れ上がっている。文法学校が普及したとはいえ、入学者数が定められているのでこれほど多い貧困者の子弟を教育するのは不可能であった。このように貧困が大きな問題となってきたのと同じ時期、17世紀末期には「労働者学校」や「慈善学校」などが出現するのだが、これらの学校は1601年のエリザベス救貧法から生まれた慈善主義の立場に立って、貧民子弟のために救貧教育所的な学校を設立することを推進してきたことの流れからきている。労働学校はあまり普及せず、「1803年の調査によれば、5歳から14歳までの男女児童188,794名の中で労働学校に通った児童は20,336人にすぎなかった」（田口、31）一方、慈善学校の普及はめざましく、「1758年の統計によれば、イングランドとウェールズにおける慈善学校数は1,329校」（田口、33）であった。慈善学校で教えていたのは主にキリスト教についてであり、その原理に基づいて上位者に対する謙譲と従順や勤勉の義務などを体得させていった。このように教育することで貧民児童に階級社会における自分の立場をわきまえることをたたきこんでいったのである。慈善学校では児童に制服を支給していたということも、自分の身分をいつでも忘れないようにするた

めであった。しかし、産業革命期に突入して児童による労働が増えていくと慈善学校も停滞していった。

18世紀の後半には労働学校や慈善学校に代わって「日曜学校」というこれもまた慈善的、宗教的な学校が進展していき、後の公立学校制度の基礎となったのであるが日曜学校も本質的には慈善学校と変わりはなく、子供の学力を伸ばすための教育というよりはむしろ貧民を教育して階級社会を温存しようとするものであった。

労働学校、慈善学校、そして日曜学校はすべて無償であったが、わずかながらも学費を支払うことができる者の子弟を対象にした「私設学校」も18世紀から19世紀にかけてよく見られた。『ニコラス・ニッケルビー』のドゥーザボイズ・ホールがこれにあたる。このような学校を運営していたのは主に老人、失業者などの経済無能者、そして他にも商売をしながら内職として経営をする、全く教育に向かない人々であった。このような学校の実態がどのようなものであったのかということを示している報告書があるが、それによると私設学校の教師の多くは商店経営などの他の職業にも就いていたため、定期的な教授が不可能であったという。また、教師や両親は教育のために子供たちを学校に通わせているのではなく、家でじゃまにならないようにするのが目的であるという共通の認識を持っていた。さらに、このような学校は非常に不衛生な地下室や荒れ果てた屋根裏部屋で開かれることが多く、伝染病が流行することもあったとされている。

この報告書に書かれていることと、ドゥーザボイズ・ホールについての記述には一致するものがいくつかある。すでに第2章でも述べたように、スキアズ氏には生徒たちを教育して彼らの学力を伸ばすという意欲は無く、できる限りの労働力を搾り取ろうとしている。スキアズ氏が何か他の商売をしてい

るといふ記述は見当たらないが、彼が教育者として不適格であるということは明らかである。

また報告書によると、子どもを学校に送り出す親の側も、学校での教育に期待しているのではなくて家にいられてはじゃまだから学校にお金を出して預けてしまっているということがわかるが、『ニコラス・ニッケルビー』の中にもこのような親が登場する。次の場面はスキアズ氏のもとを、子どもを彼の学校に入れたいという男が訪ねてきたときの会話である。

“The fact is, I am not their father, Mr. Squeers. I’m only their father-in-law.”

“Oh! Is that it? That explains it at once. I was wondering what the devil you were going to send them for. Ha! Ha! Oh, I understand now.”

“You see I have married the mother. It’s expensive keeping boys at home [...]. And this has made me anxious to put them to some school a good distance off, where there are no holidays--none of those ill-judged comings home twice a year that unsettle children’s minds so.” (Dickens, 34-35)

最後に、私設学校内で病気が蔓延し、死んでしまう子どもも出ているということについてであるが、ニコラスがスマイクと初めて会話をした場面ではスマイクが学校内で死んでしまった少年について話している。

“Why, I was with him at night, and when it was all silent he cried no more for friends he wished to come and sit with him, but began to see faces round his bed that came from home; he said they smiled, and talked to him; and he

died at last lifting his head to kiss them.... What faces will smile on me when I die!" (Dickens, 97)

教育は主に慈善主義の学校によって行われてきていたが、1870年に「初等教育法」が作られたことにより、ついに教育が国家の義務として扱われることとなった。この法令は「新たに地方教育行政機関として学校委員会を設け、この委員会をして私立学校が十分でない地域に、地方税や授業料などで維持される公立小学校 (Board School) を設置せしめること」(田口、96)を定めている。この法律では5歳から10歳までの小学校段階でしか義務教育が実現しなかったのだが、1944年に再び行われた教育改革によって、5歳から15歳まで無償の義務教育が保障されることとなり、それとともに慈善主義の学校はボランティア・スクールとして公営のものとして政府の統制下に組み込まれ、公営学校として子どもに無償の義務教育を保障することになった。

2-4 救貧制度・慈善主義が学校給食に与えた影響とその後

1789年にフランス革命が起こり、同じ年に国民議会によってフランス人権宣言が採択されたことに見られるように、早くから権利意識が高かったフランスは世界で最も早い時期に法制を定めて学校給食の実施を行政当局の義務とした国である。国家は子どもの精神的教養と身体的教養に対して責任をとる、という見地から、1849年から半官半民で学校給食事業を開始し、1882年の義務教育法で学校資金制度の設置を義務付け、この資金で自治体が給食を実施するようになった。

貧困者らを無理やり働かせることによってより多く搾取しようという考えが背景にある救貧制度や、子どもたちに自らの階級を体得させることを重要視していた慈善的な学校に

伴い、貧困者は迫害され、彼らに向けられるそのほかの人々の視線は冷たいものであった。

子どもの教育を国家の義務として定める法律がまだできていないことはもちろん、このような考え方や価値観が人々の間に広まっている中で、イギリス国内のそれぞれの学校は国からの指導や支援を受けることなく子どもたちの食事を担うことになり、最低レベルの食事しか与えないというような状況が生まれてしまった。つまり、ドゥーザボイズ・ホールで生徒たちに与えられていたような劣悪な学校給食の原因は、フランスにおける学校給食が子どもの権利・国家の義務として保障されていたのに対し、イギリスでは救貧的、慈善主義的なものであったためであると考えられるのである。もしそうであるとするならば「子どもたちに自らの階級を体得させる」ためにわざとほんのわずかの食事しか与えないという行為があったとしてもおかしくはない。実際、19世紀前半において「わずかな分量を耐え難いメニューで与えることは、反抗的な若者に対する良い躰である」(安達、173)と考えられていたという記述もある。

では、19世紀の後半にはイギリスの学校給食は改善したのだろうか。前述のとおり、1850年代以降、救貧制度に対抗して労働者が権利を手にするようになり、それと連動するように1870年には「初等教育法」が制定され、国家が教育に介入するようになった。ところがこの法律には学校給食を国家の義務と定める部分はなく、公立学校を設置することにとどまっていたため給食の内容が改善されるということにはなかった。

しかし、国家が子どもの教育を促進しようとするなかで、しっかりと給食を子どもたちに与える必要性も出てきたようである。その原因の一つには、食事を与えることが困難な貧困家庭の子どもは体力的にも精神的にも衰弱しており、教育の効果を十分にあ

げることができないということであり、ここでやっと十分な栄養を摂ることと学力を上げることが結びつけて考えられるようになったのだということがわかる。もう一つの理由としては、人々の貧困者に対する見方が以前とは変わってきたということが挙げられる。産業革命以降、ニューヨークで1929年に起こった世界恐慌まで約10年ごとに恐慌が起こるようになってしまい、自分にはどうすることもできない状況の中で仕事を失い、貧困に陥ってしまう人々が非常に多く発生した。これを受けて人々は貧困を個人の問題や責任ではなく、社会問題としてとらえるようになっていったのである。このような世論、そして労働者家族自身が学校給食の保障を求める主張に後押しされ、1906年には「教育・給食法」が制定された。「公的學校給食は『社会主義の政策であり認めがたい』と非難する声」(新村、32)や救貧行政当局からの妨害などもあり、この制度では学校給食の必要に応じて自治体が公的に実施し、公金を使うことを認めることで学校給食を奨励するにとどまった。したがって、完璧に国家の義務となったわけではなかったが、この法律は学校給食が単なる救済のための事業ではなく、公的な教育のサービスへと転換したことを示すものということができる。

子どもの権利として普遍的に学校給食が保障されるような制度ができたのは1944年に教育法ができてからのことである。この法律には各自治体が希望する公立校生徒すべてに給食を与える義務を負うことが明記された。1947年に労働党が政権を握るとこの制度は完成して学校給食の全費用に公費が使われるようになり、提供される学校給食は栄養基準に基づいた充実したものであった。その後、一部の費用を各家庭が負担することとなったが、その額は1975年の時点で約30円(15ペンス)に過ぎず、やっと理想的な学校給食が実現したのである。しかし、1979年に発足し

たサッチャー政権によって教育政策にさまざまな変化が起こると、給食のあり方が再び変化し質が低下していくこととなる。

3. 再び危機に陥る学校給食とその対策

3-1 現代イギリスにおける学校給食の問題点

第二次世界大戦後のイギリスの食に起こった変化としてインスタント食品や調理済食品、缶詰、冷凍食品などの出現が挙げられる。これにより、戦時中に食料が配給制だった頃に比べて人々の栄養状態は大幅に改善された。しかし、工場生産食品が急激に普及したことによって人々の健康が増進されたとは言えない。1977年にイギリスに「ハイパーアクティブの子どもたちを守る会」というボランティア団体が結成された。「ハイパーアクティブ」というのはある特定の行動パターンのことであり、ハイパーアクティブであると言われる子どもには次に挙げる四つの共通する特色が見られる。

1. 衝動的でオーバーアクティブ
2. すべてのことに集中力がない
3. 学習困難
4. 手に負えない

(『恐るべき食品添加物と問題児——イギリスのホールフード運動』)

このような子どもの症状に悩み、どうしたらよいのかわからずに途方にくれる親は非常に多く、「ハイパーアクティブの子どもたちを守る会」を作ったサリー・バンディ自身もそのような子どもに悩まされていた一人であった。彼女は友人からアメリカで食事療法を提唱しているアレルギー専門医のベン・フェインゴールド博士を紹介され、その食事療法を実行してみたところ彼女の子どもの4日後には効き目が現れ、ゆったりと落ち着きのある子どもへと変化したのである。ハイパーアク

ティブの原因になっているものは食品添加物であるということがアレルギー専門医やこのボランティア団体による研究からわかっており、食事療法の内容も、無添加の食べ物ならいくら食べても良いが添加物の含まれている食品は徹底的に避けるというものである。会員は全国各地に増えていき、1985年には『Eナンバーは添加物』(*E. for Additives: The Complete E Number Guide*)という本がベストセラーとなった。Eナンバーというのはヨーロッパ経済共同体共通の食品添加物をナンバーで表したものである。これには日本ではなじみのある味の素もナンバー621として含まれている。この本の売れ行きがよかったということはイギリス人が食の安全について以前よりも興味を持ち始めたということを示している。また、1988年にはこの団体の努力が認められ、「デイリー・ミラー」紙から多額の寄付金が届けられた。この流れを受けて、イギリス国内の学校でも子どもたちに健康的な食べ物についての教育が行われ始めた。当時の学校給食は任意制であり、給食を利用する生徒もお弁当を学校に持参する生徒もいたが、学校の食堂のカウンターに並んでいる食べ物ひとつひとつに「いい食べ物」、「体によくない食べ物」などの表示を貼ったり、同じようなポスターが教室、掲示板、食堂などに貼り出されたりする学校が増加した。

一方、「ハイパーアクティブの子どもたちを守る会」ができてから2年後の1979年にサッチャー内閣が誕生した。保守党は総選挙時に「小さな政府」を実現してイギリス経済の悪化に歯止めをかけるために公共支出を大幅に削減することを公約しており、発足後は公約どおりにさまざまな改革が行われ、教育関係の財政支出も全面的に削減された。そのため、学校給食にあてられていた年間3億8,000ポンドの予算は初年度には半額にされ、各地方の教育当局は食材の費用を切り詰めて加工食品を使用するように指導され、給食の質の低

下の発端となった。

また、1980年には教育法の改正が行われ、地方教育当局に学校給食制度を廃止する権限、あるいは学校給食の生徒徴収金額を独自に決定する権限が与えられた。これによって給食提供をやめてキッチンを閉鎖する学校や、給食代の引き上げによって給食を希望する生徒数が3分の1にまで激減した学校もあった。

さらに、1986年にはまだ学校給食を提供していた自治体の義務として、民間の給食提供業者を競争入札で選ぶことが定められた。競争入札というのは、業者同士に内容や金額などの条件の競り合いをさせ、最も有利な条件を示す者と契約を締結するというものであり、サッチャー革命による市場原理の導入がここにも現れているのである。

学校給食制度の完全民営化はこのようにして行われ、民営化と同時に栄養基準までもが廃止されてしまった。学校給食の民営化によって起こったのはさらなる質の低下である。予算の削減が行われたことによって苦しんでいた各自治体は低価格で子供が喜ぶ給食を作る業者を好んで選んだため、メニューにはフライドポテトやチキンナゲットなどのファーストフードのようなものばかりが並ぶようになった。1997年に労働党のブレア政権が発足すると、2001年に最低栄養基準が定められ、各校が独自に給食提供業者を選ぶことができるようになったが、自治体によって選定された業者と従来どおりに契約する学校がほとんどであったため、給食の内容が劇的に改善されることはなかった。

1970年代の終わりから1980年代にかけて食、それも特に子供の食の安全についての人々の関心が高まりを見せていたにも関わらず学校給食の質が急速に低下してしまったのはなぜなのか。その原因にも貧しいかそうでないかという階級の差が関係しているのではないだろうか。

1979年までは全ての公立校が生徒に学校給食を提供しており、一部家庭が負担していた金額である生徒徴収金額は大臣によって全国一律に定められていた。しかし学校給食にあてられる予算が半分になり、各学校は給食を運営することが苦しくなってしまうところで各自治体が独自に生徒徴収金額を決めることができるという制度ができたため、当然給食代を引き上げる自治体が出てくるのである。その負担は裕福な家庭であればそれほど大きなものではないかもしれないが、貧困家庭にとっては大きな痛手となってしまったために給食費を払うことが困難になり、給食を希望しないという選択をとる生徒が増加したのであると考えられる。質の低下した給食を食べるのをやめ、お弁当を持参したり一旦家に戻って昼食をとったりするのであれば問題がないのかというところではなく、共働きが多い貧困家庭では母親が料理に時間をかけるということが非常に少ないため、家でとる食事ファーストフードのような冷凍食品や缶詰が多く、栄養面で優れているということはないのである。

給食提供業者を選定する段階においても、コストが低いことがより重視される貧困家庭の多い地域であればあるほど、質の低下が著しかったと考えられる。予算の削減が全国共通であったとはいえ、足りない分を補うために家庭が支払わなくてはならない金額が共通ではないのであれば、貧困地域では負担を考慮して徴収金額はいくらか少ないかもしれないがそれが重荷であることには変わらず、少ない金額しか集めることのできない学校は低価格の質の落ちる給食を提供せざるを得ないのである。一方、裕福な家庭の多い地域の場合は各家庭の負担をそれほど心配する必要がないため、給食の質の低下もあまり起こらなかったのではないかと考えられ、身分や経済状況による学校給食の格差が起きてしまったのだといえる。

このように、食の安全に以前よりも敏感になる人が増えたとはいえ、働く母親が増えたことと加工食品が普及したことが重なったことによって家庭で料理をすることが減り、特に貧しい家庭ではこのような食事の変化が著しかった。つまり、労働者階級の多い地域では食の安全を求める流れよりも食の近代化の流れのほうが勝っていたために学校給食においても質の低下があまり問題視されなかったと考えられる。

『ニコラス・ニッケルビー』が書かれた頃の質の悪い給食によって起きたのは栄養不足からくる発育不全などの身体的な変化であった。それに対し、今回の質の低下が引き起こしたのは「肥満」である。校内には自動販売機が置かれて砂糖のたっぷり入った清涼飲料水やポテトチップス、チョコレートなどが自由に購入でき、食堂にはピザ、ホットドッグ、フライドポテト、チキンナゲット、フィッシュフライが並び、家に帰っても似たようなものを食べる生活では糖分と脂質の過剰摂取が起き、逆に食物繊維やビタミン類は極端に不足してしまう。

イギリスの保健省 (Department of Health) による2002年の統計では2歳から15歳までの約15%が肥満であり、標準体重以上の「太り過ぎ」は約30%にまで上った。1995年には肥満児童は約10%であったから7年間に肥満児童の数が1.5倍になったことになる。同年、「医師会は子供の間に肥満が原因で糖尿病、心臓病が増えている実態を指摘し、食事内容改善の警告を何度も警告を発し」(阿部菜穂子、278)、肥満はイギリスの社会問題となっていった。また、2004年には下院の健康に関する調査委員会 (Commons health select committee) は、このまま何も対策をとらなければ2020年までに児童の半分が肥満になり、その多くが両親よりも先に死亡する可能性があるというレポートを出した。2006年にイギリスの国立健康増進局

(National Health Service) が出した統計では、国民の階級と収入による肥満率の違いも示されており、階級が低く、収入の少ない家庭の子供ほど肥満率が高いことがわかっている。国民の中に危機感が広まる中で、保健省は同じ年に国民の健康推進を目指して「健康の選択」(Choosing Health: Making Healthier Choices Easier) という健康白書を発表するなどの動きがあったが学校給食の内容の改善は明記されていなかった。

3-2 学校給食改善運動

2005年の春から、子供たちの食生活に危機感を抱いたジェイミー・オリバーという人気シェフが学校給食改善運動を始めたことがきっかけとなってイギリス国内で親たちを中心として給食の改善を求める運動が広まり、大きな変化が見られている。オリバー氏は1999年から自分の料理番組を持ち、数々の料理本を出版しているほか、ロンドンやアムステルダムなどで四つのレストランを経営しており、彼の料理番組は日本のケーブルテレビでも放送されている。

彼の運動の様子はイギリスで“Jamie's School Dinners”という番組で5回に渡って放送された。彼はロンドンのはずれに位置するグリニッジという町の学校の一つであるキッドブルック校を訪ね、給食に新しいメニューを取り入れることを試みるのであるが、一人一食分わずか37ペンス(約80円)という厳しい予算、そして生徒たちからの反発などのさまざまな問題が発生する。ジェイミー氏の新しいメニューには新鮮な野菜のサラダと鶏肉に化学調味料ではなく、スパイスやハーブなどで味付けをして焼いたものや、野菜をソース状にして生徒たちに受け入れられやすくした栄養満点のピザなどがあったのだが、始めの1ヶ月が過ぎた時点ではまだ生徒の8割がジャンクフードを選んでいった。しかしジェイミー氏は栄養失調で病院に行く子

供もいることを知り、学校でのジャンクフードの禁止という過激な手段をとる。当然、不満の声が多くあがり、どうしても食べない生徒たちのためにサンドイッチという救済措置はとられたが、1ヶ月が経つと健康的な給食の需要が増え、さらに後には以前であれば100件以上はあった苦情が1日に2件ほどにまで減ったのである。

ジェイミー氏は番組の中で、貧しい地域の学校給食の状態の方がさらに深刻であるということの人々に紹介することも忘れていない。彼はグラム州のピータリーという1950年代には鉱山で栄えていた町を訪ねたのだが、そこで訪問したエデン小学校では生徒の70%が無料給食を食べているということから、ピータリーが貧困地域であることがわかる。不健康な食生活が蔓延しているために子供専用の便秘クリニックまであるということを知った地区の栄養士から聞かされたジェイミー氏はそこでも新しい献立を紹介し、生徒たちと一緒に料理する機会を設けるなどした結果、新しい給食が大変喜ばれるというとても良い結果であった。さらに半年後にはグラム州は学校給食の予算に1億圓を投入することを決定した。

ジェイミー氏はこの良い変化をもっと広い地域に広めるため、グリニッジの60校の校長に許可を得てさらに2万人の生徒たちに対して新しい献立を試みるというプロジェクトを始めた。すると教師たちは生徒たちの素行が良くなって午後はいつも集中力が散漫になるのがなくなり、喘息の生徒たちの発作も全くなかったと述べ、態度と健康がともに向上したことがわかった。

一つの地域で給食の改革に成功して自信をつけたジェイミー氏は学校内でのジャンクフードの全国廃止と給食スタッフへの予算の増加を政府に求めるが一旦は却下されてしまう。しかしジェイミー氏は27万を超える署名を集め、トニー・ブレア首相とルース・ケリー

教育相に嘆願書を提出した。総選挙を目前に控えていた政府はこれを無視できず、今後3年間に2億2,000ポンド(約440億円)の予算をつけると述べ、小学生一人あたりの予算も最低でも50ペンス(約100円)にまで引き上げることを約束し、選挙の公約に加えられた。

ブレア首相の労働党が当選を果たしはしたが、「イラク戦争遂行が有権者の批判を集めて大幅に議席を減らした。」(阿部、279)という厳しい状況にあり、首相は「失った国民の信頼を回復することを狙って」(阿部、279)公約に掲げた学校給食問題をおろそかにはできず、「学校給食審議会」や「学校給食改善委員会」を立ち上げた。その結果、2006年9月には「学校給食の暫定的な基準」“The interim food-based standards for school lunches”、そして2007年9月からは「政府による学校給食の新基準」“Government’s new school food standards”が採用されることとなった。

各自治体や学校を対象としているこの新基準の内容は、献立に含めなくてはいけない野菜、魚、パン、水、健康的な飲み物の大体の量や、調味料やポテトチップなどのスナック類、揚げ物、肉を制限すること、そしてチョコレートなどの菓子類は禁止することを示している。さらに細かな栄養基準については2008年に小学校で、2009年に中学校で採用されることとなっている。また、ジャンクフードが子供たちに与える影響を考慮して2007年1月からはジャンクフードの広告が規制されるなど、ジェイミー氏や親たちの声が届いた結果、国家規模での改革が進んでいるのである。

おわりに

以上のように、ディケンズが『ニコラス・ニッケルビー』の中で描いた学校給食が当時の実態を映し出しているということを踏まえ

た上でその原因を探った結果、救貧制度と教育制度の二つの側面に問題点が見えてきた。

一つ目には、貧しい人々のために設けられた救貧制度がどれもさらに彼らを苦しめるだけのものにすぎなかったということであり、そこからわかるのは、当時の資本主義の急激な発展によって生存権よりも自由権が重んじられるようになってきており、貧困者が社会から軽視される存在となってしまうということである。

そして二つ目には、このように開いてしまった格差を問題としない風潮のもとで作られた無償の学校もしくは学費の安い学校では、階級社会を維持するための教育が行われていたということである。つまり、貧しい人々の権利が考慮されることなく、軽視され続けてきたことがそのまま学校給食にも現れていたということ、さらに言うならば、貧しい人々を貧しい人々であり続けさせるために学校給食を利用していても考えられる。

その後一旦は理想的な給食が実現したものの、20世紀の終わりにも似たような現象が見られ、学校給食の民営化によって貧困地域になればなるほど学校給食の質が悪くなるという格差が生まれたのであるが、この発端となったのもまた社会や経済の大きな変化、つまり市場原理主義の導入であった。

これらのことから、国家の発展に直面した場面や、サッチャー革命のように国を立て直すための改革が行われた際のどちらにおいても、弱者よりも経済的に有利な者の利益や国益が優先された結果、より階級の低い人々の方がより大きな苦勞を背負わされてしまうという事態が起きたことがわかった。19世紀には栄養失調、20世紀の終わりから21世紀には肥満と、全く逆のものではあるがどちらも深刻である健康問題に脅かされる危険度が高いのはいつも階級の低い人々であった。民営化によって質が低下した20世紀末の学校給食であるが、19世紀における学校給食も国家

が全く介入していなかったという点では完全民営であったとすることができる。イギリスにおける学校給食のこのような歴史は、民営や民営化が必ずしもどの分野においても良い結果をもたらすとは限らないということを示しているのではないだろうか。

参考文献

- 秋島百合子『パブリック・スクールからイギリスが見える』朝日新聞社、1995年
- 安達まみ、中川僚子編著『〈食〉で読むイギリス小説』ミネルヴァ書房、2004年
- 阿部菜穂子「イギリスで巻き起こる給食革命」『世界』2005年11月号、岩波書店、2005年、274-280頁
- 伊村元道『英国パブリック・スクール物語』丸善株式会社、1993年
- 厚生省保健医療局健康増進栄養課『日本人の栄養所要量』第一出版、1998年
- 新村洋史『いま考える学校給食』汐文社、1992年
- 田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社、1975年
- 津野志摩子『恐るべき食品添加物と問題児——イギリスのホールフード運動』バーディ出版、1989年
- ディケンズ、チャールズ『David Copperfield (I)』山本忠雄注釈、研究社出版、1960年
- 原田種雄・吉田正晴・手塚武彦・桑原敏明編『現代フランスの教育：現状と改革動向』早稲田大学出版部、1988年
- ヒューズ、トマス『トム・ブラウンの学校生活』前川俊一訳、岩波書店、1989年
- 藤村公輝『ディケンズの教育観』英宝社、1996年
- 松村昌家・川本静子・長島伸一・村上健次編『英国文化の世紀2——帝国社会の諸相』研究社出版、1996年
- 丸山英二編『飢餓』ドメス出版、1999年
- メネル、ステイブン『食卓の歴史』北代美和子訳、中央公論社、1989年
- Cobbett, William. *Rural Rides*. London: J. M. Dent, 1853.
- Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. New York: Oxford University Press Inc., 1998.